PDF issue: 2025-05-08

#### 接続助詞「と」の用法と意味

#### 鈴木, 義和

(Citation)

國文論叢, 13:51-61

(Issue Date)

1986-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/81011748

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011748



## 一 本稿の目的

「ば」「と」「たら」「なら」が取り上げられ、も得て、近年とみに益んな様相を呈している。そこでは、主に現代語の条件表現に関する研究は、日本語教育の立場からの発言

- ⑴ 各条件表現形式の持つ用法の多様性とその分類。
- ② 条件表現形式間の用法の差異とその使い分けの実態。
- ③ 個々の形式それぞれの基本的意味。

で網羅的になされているのだが、現象間の内面的な関係や根拠に関れる。つまり、個々の現象の記述についてはかなり細かいところま係などについては、未だ十分な解釈が与えられていないように思わ用法の差異の生じる理由、そして、それらと③の基本的意味との関しかしながら、⑴に指摘された多様な用法間の相互関係や、⑵のなどについて多くのことが明らかにされてきた。

今後に残された大きな課題と言えるだろう。体系の提示はなされていないのである。条件法の体系の見直しは、体系の提示はなされていないのである。条件法の体系の見直しや新たなを無反省に適用するか無視するばかりで、根本的な見直しや新たなつとに松下大三郎氏のものがあ(デル)、近年の研究においても、これつとに松下大三郎氏のものがあ(デル)

鈴

木

義

和

本稿の目的は、「と」の条件法を論ずることによって、これらの本稿の目的は、「と」の条件法を論ずることによって、には」等を含めた条件表現全体を対象とするのが望ましいのだが、には」等を含めた条件表現全体を対象とするのが望ましいのだが、には」等を含めた条件表現全体を対象とするのが望ましいのだが、には」等を含めた条件表現全体を対象とするのが望ましいのだが、れる。そこで本稿では、体系化を目指すという立場に立った上で、れる。そこで本稿では、体系化を目指すという立場に立ったと思われる。そこで本稿では、本系化を解析すると共に、部分的にせよ体系化への発言を試みようとそれを解釈すると共に、部分的にせよ体系化への発言を試みようとこれるの単語を解するとによって、これらの本稿の目的は、「と」の条件法を論ずることによって、これらの本稿の目的は、「と」の条件法を論ずることによって、これらの本稿の目的は、「と」の条件法を論ずることによって、これらの本稿の目的は、「と」の条件法を論ずることによって、これらの本稿の目的は、「というない」といいます。

ると」のように接続詞となっているものについても、本稿では取り前おき的用法、後置詞化した用法等と呼ばれるもの、および、「すまた、同様の理由から、「~から言うと」「~にくらべると」など、

れなかったのも、また当然のことであった。条件法の体系としては

このような研究の現状において、条件法の体系化への指向が見ら

しては、論ずべき余地が大いにあると見られるのである。

上げない。

分な意義があると考えるからである。 松下氏の示した方向は正しく、これを継承発展させていくことに十松下氏の示した方向は正しく、これを継承発展させていくことに十に関して、改訂、追補すべき点は多く残されているが、基本的には、定」「未然仮定」の三者を基本におくことにしたい。名称、内容等定」「未然仮定」の三者を基本におくことにしてい、名称、内容等

# 二 接続助詞「と」の基本的意味

こい。ものであるが、論述の都合上本節であらかじめ述べておくことにしものであるが、論述の都合上本節であらかじめ述べておくことにしてれは、本来「と」の用法の総体を検討した上で導き出されるべきはじめに接続助詞「と」の意味の基本的な性格を規定しておく。

性の内実のいかんを問わずに、かつその関連性の内実について二つのできごとを何らかの関連性を持つ二者として、その関連本稿では、接続助詞「と」の基本的意味を次のように考える。

積極的に表現することなく、結びつける。

であれ、恒常的なものであれ)に沿って結びつけるものであると言きごとを客体世界におけるできごと間の秩序(偶発的一回的なものるままに表現するということである。接続助詞「と」は、二つのでとは、すなわち、「と」が二つのできごと関係を見たまま、見られこのように二つのできごとの関連性の内実に立ち入らないというこ

表すものであるとする見方がある。例えば、国広哲弥氏は、「と」表すものであるとする見方がある。例えば、国広哲弥氏は、「と」ところが、これに対して「と」の基本的意味は時間的前後関係をうことができるのである。

の意義素の一つとして

いる - 「日時間的に前後して起こり、統一的関連性で結ばれている」

をあげ、松田剛史氏は、「と」の意義を、

状態の間には、明確な切れ目が存在する。作・作用や状態に連続してゆくが、前件と後件の動作・作用や前件の動作、作用や状態が完了・成立し次に現れる後件の動

と規定している。

うまく説明できないと思われるものがかなりある。しかし、この時間的前後関係という意味からは、次の例のように、しかし、この時間的前後関係という意味からは、次の例のように、

いと投手が悪いということの繰り返しで、こままでずっと優勝2.その野球チームは、毎年投手がいいと打者が悪く、打者がい1.よく見ると、それは小さな石のかけらだった。

また、

できないでいた。

3 夜が明けたら、出発しましょう。

のような例を「と」で言いかえることができない理由も、

時間的前

接続助詞「と」の用法の全てを説明できるものでない以上、基本的であったこともほぼ疑いないようである。しかし、それが現代語の例は多く、また、語源論的にはそれが接続助詞「と」の本来の意味確かに「と」が時間的前後関係を表していると見ることができる後関係ということからだけでは説明できないのである。

ることの事情は、先に述べた本稿での意味の性格規定によって、全々な関係を表現し得ること、そして、その用法がそれだけに限られ接続助詞「と」が様々な用法を持ち、時間的前後関係を含めた様な意味の規定としては失格であろう。

## Ξ 個別的事態を表す「と」

本節では、 個別的事態を表す「と」、すなわち、

うであった。 山頂から見下すと、神戸の街はさながら宝石を散りばめたよ

のように接続助詞「と」が既定の一回的な事態関係を表す場合を取 5 ドアをノックすると、 部屋の中から返事がかえってきた。

り上げる。

型」と名づけることにしよう。 点が前後旬事態から独立しているという意味でこれを「視点独立 と名づける。 視点が前句の主語に置かれるという意味でこれを「前句内視点型」 は、後句事態を認識するものが前句の主語に限られる場合であって、 の関係から、大きく二つのタイプに分けることが可能である。一つ この場合の「と」 もう一つは、そのような制限が無い場合であって、視 の用法は、 前後句事態とそれを認識する視点と

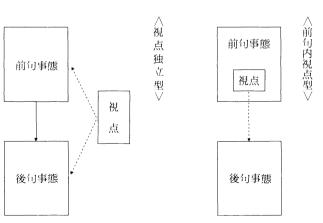
この両者の関係を図によって示しておけば、下段のようになる。

### 三 の (1) 前句内視点型

る。前者を「発見」、後者を「発現」と名づければ、その例には次何述語が動作の継続で後句述語が動作性である場合の二タイプがあ のようなものがあげられる。 (またはある状態を認識すると意味を持つもの)である場合と、 - 前句内視点型」には、前句述語が動作性で、後句述語が述態性 前

- 宿に帰ると、食事の用意ができていた。
- 窓を開けると、 日の前に淡路島が見えた。

7



8 教えられたとおりタバコ屋の角を右に曲がると、小さな花屋

あった。

9 (以上「発見」) よく考えてみると、 彼の言ったことは矛盾だらけだった。

10 昨日梅田の街を歩いていると、変な男に声をかけられた。

11 家で昼寝をしていると、友人から電話がかかってきた。

12 道に迷った花子ちゃんが一人で泣いていると、親切なおじさ 難しい論文を読んでいると、頭が痛くなってきた。

> においては、 例えば例6、

んが来て道を教えてくれました。(以上「発現」)

発見」の場合について後旬事態を認識するものが前旬主語に限

れは、 るし、 るが、「発現」の場合でも、全く同様のことが言えるのである。そ られることは、既に豊田豊子氏によって指摘されているとおりであ また、 前句の主語が原則として人に限られていることにも現れてい

入ってきた。 私の部屋で山田くんが本を読んでいると、田中さんが部屋に

味にならないことからも確かめられる。 と、つまり、「私」もその部屋に居て後旬事態を認識したという意 という例で後句事態の認識者が「私」でなく「山田くん」となるこ 松田剛史氏は、「状態性述語と動作性述語の組み合せ」の文とい

の視点の置かれる場所を重視している点で、前旬の行為主体その人し手の視点」が「元々前件の側に置かれている」とし、とりわけそ この松田氏の考えに近いものと言えよう。ただし、松田氏は、「話 点」という観点が重視されることを指摘しているが、本稿の立場は、 う点で本稿の「発見」「発現」を一括し、この場合に「話し手の視

> とは本来話し手自身の視点と考える点では本稿も同じ立場を取る。 きないと思われる さて、松田氏はここで「話し手の視点」と言っているが、「視点 例14で後旬事態の認識者が「私」とならないことの説明はで 10の前句主語を話し手以外に変えた場合、日常会話

に視点が置かれるという本稿の考えと異なっている。

松田氏の見方

島村さんが宿に帰ると、食事の用意ができていたそうだ。

16 15 たんですって。 彼女、昨日梅田の街を歩いていると、変な男に声をかけら

のように必ず伝聞の形にしなければならない。これは、

感情

外の場合には伝聞の形をとることと類同であり、「前句内視点型 形容詞が述語である場合の主語が本来話し手自身であって、それ以

の前句主語が本来話し手自身でなければならないことを示している。 もちろん、例13や次の例、 さますと、自分が寝床の中で一匹の巨大な毒虫に変っているの ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気がかりな夢から見を

許されることである。このような文脈では、感覚、感情形容詞文に 話し手の視点を自由に他者に転移させることができる文脈において おける主語の制約も無くなってしまうことは、言うまでもない。 のような場合もあるが、これは、あくまで小説やおはなしのように 次に、「発見」と「発現」二タイプの相互関係について述べる。

両者の関係は、次頁のように図示することができる。

を発見した。(カフカ『変身』、高橋義孝訳

認識ならぬ新たな認識の成立であれば、 が見出されるであろう。 動 事態の間に時間的な重なりが必要であって、 <発見> 「発見」 が 言である他 前旬事態(行為) 「発見」と「発現」の二タイプに分けられ、 時間 子態を認識する。 前句内視点型」では、 ع 2の幅を持った状態・継続であり、 「発現」 は 後旬事態の存在 ない。 時間の推移 認識成立 その認識が成立するためには、 の間には、 前句内視点型」 前句行為の主体が前句の 対称的 <発現> な相異と共にある共通の が 認識成立 前句行為と後句事態 右の 一つがある時点における 時間の推移 前句事態 (行為の継続) かつ、 図 かつ、 のような関係にあ それが継続的 前句行為と後句 行為におい その二タイプ 後旬事態の発現 は、

> そも問題とされる必要がない。 この場合には、 様のことは、 あろうという意味で、できごと間の内容上の関係は皆無である。 で言えば、 ような関係は無いともとれる。 三 の (2) 前句内視点型」ではこのように現われるのであった。 18 その結果、 の有無は問題にされていないものと見るべきであろう。 19 「視点独立型」の場合でも、 本を読んでいると、 会場に入ると、中には既に大勢の人が集まっていた。 が前後句の関連 会場に入ろうが入るまいが、 「視点独立型 「発現」 前句事態と後句事態のできごととしての関係は、 本を読んだから眠くなったともとれるが、 の次の例でも言える。 /性の内実に立ち入らないとしたこと 眠たくなってきた。 例えば、 その と言うより、 「視点」が本来話し手自 「発見」 大勢の人が集まっていたで そもそもその の次の例、 め 別にその ような関 れる。

視点によって前後句間の関連性が保証されているのである。 句と認識される後句の関係としてとらえることができる。

さて、 か

ے

は

「何らかの関連性を持つ」二事態を結びつ

無い

のは、 前節で

このような事情によるものであ

るとしたが、

て の

「前句視点型」

では、

その関連性は認識する前

まり、

そも

この話し手の視点から前後句事態が認識されるのだが、 のであることは、 前後句事態とは独立したところにある。 「前句内視点型」と同様の作業で確か

Ś

視点

ば

て後

構造

視点の独立ということは 私が名前を呼ぶと、 彼女はさっ と振り向 ίĭ

. t:

20

人に限られるといっ

た制限は、

ح の

「視点独立型」

12 は 前句の主 その

したがっ

は

のように話し手自身が前句の主語となっている場合でも言えるもの

である。 中島くんが名前を呼ぶと、彼女はさっと振り向いた 例20は、 同一の文型で前句主語を入れ替えて、 (のを私

とすることができる。例20では、前句主語と後句事態の認識者がた

例20のようなものも、「視点独立型」として考えることができる。 行為において後句事態が認識されるという関係があるわけではない。またま一致しているだけであって、「前句内視点型」のように前句

「視点独立型」では、このように話し手の視線が前後旬事態のそ

に求められる他ないのである。 要とされる「何らかの関連性」は、前後句事態間の内容上の関係性 証されるということが無い。その結果、「と」の結ぶ前後句間に必 句内視点型」のように話し手の視線によって前後句間の関連性が保 れぞれに対して別箇に、言わば公平に向けられているために、「前

制限を一言で言えば、その関連性が見た目でそれとわかるような関 という「と」の基本的性格から、そこには自ずと制限がある。 ごと間の関連性の内実のいかんには積極的に立ち入ることはしない 事態間の内容上の関係としては様々なものが考えられるが、 でき その

連性でなければならないということであろう。

前後旬事態間の時間的前後関係が明白であることが必要であるため これがその制限の一つの現れである。できごと間の先後関係が曖昧 前後句述語は共に動作性のものでなければならないのである。 「視点独立型」の前後句述語は動作性のものに限られるのだが、 このように時間的に前後して成立し、 見た目で両者の関連性を認識することは困難であろう。 見た目でそれとわか

> 下では、このタイプの違いによって「視点独立型」の内部を細分し る関連性を有する二事態には、いくつかのタイプが考えられる。 て、具体的に見ていくことにしよう。 まず、前後句事態の関連性が同一主体の連続的な動作という点に 以

求められるものがある。 22 彼は部屋に入ると、 ソファーに腰かけた。

23 そのジェット機は轟音を響かせると、 大空へと舞い上がって

このようなタイプを豊田豊子氏に従って、「連続」と呼ぶことにす(fi) った。

る。 次に、ある事態が成立すればそれに反応してもう一つの事態が成

立することがあるという一般的な知識を前提として、

の関連性が理解される場合があげられる。これを「反応」と名づけ

ることにしよう。 24 ストーブを消すと、部屋の温度が急激に下がった。

白いボタンを押すと、赤いランプが光った。

25

合が多く、それがこのタイプの意味であるとされることもあるが、 このタイプの前後句間には、例2のように因果関係が認められる場

果関係があるものが多く、 ある事態とそれに反応して成立したと見える事態の間には現実に因 「と」自身がそのような関係を表現しているのではもちろんない。 それが結果として「と」の文から読み取

まで立ち入ってはいないのである。 られるに過ぎないのであって、「と」は、そのような関係の内実に 前句が時の推移を表しているものが一タイプとしてあげ

られる。

前後旬事態間

独立型」に二大別し、その用法と意味について考えてきたが、(ほ) で、これと条件法の体系との関係に簡単に触れておきたい。これら ح ح

これは、「時」と名づけるのが適当だろう。この場合には、時があ

しばらくすると、向こうから大勢の人がやってきた。

らゆる事態の生起、変化、消滅の根底に流れており、ある意味で常

後句事態と関連性を持つものと認識されるのだと考えられる。 にその要因となっていると言えることから、時の推移を表す前句は

この三タイプで「視点独立型」のほとんどの例を覆うが、なお、

少数ながら次のようなタイプのものも認められる。

サッカーの試合が始まると、にわかに激しい雨が降り出した。

朝食の用意ができると、ちょうど良い具合に皆が起き出して

例2では降雨が試合に影響を及ぼすという関係、例2ではできた朝

間に認められる。すなわち、ある場面において前後旬事態間に何ら 食を食べるのに皆が起きたのが好都合であったという関係が二事態 ているわけである。このような関係にあるタイプは、「場面」と名 かの影響関係があるという意味で前後句事態間の関連性が認められ

づけることができるだろう。

|視点独立型||の「と」の用法は、以上の四タイプに分類され、

極めて異質な内容のものであることも、注目される点である。事態 先に述べた制限の結果なのであった。また、この四タイプが相互に これ以外のタイプは存在しない。この四タイプに限られることが、

間の関連性の内実のいかんに立ち入らないという「と」の性格が、 ここに如実に反映されていると考えられるのである。

個別的事態を表す「と」を「前句内視点型」と「視点

それを「偶然確定条件法」とすることにも問題はない。と言うより の「と」の用法が確定条件法に属することは言うまでもなく、また、

関連性の内実のいかんを問わず、かつその関連性については積極的 に表現すること」がないという基本的性格にこそ求められるべきも ると考える。「偶然」ということ意味は、「と」の「(前後句事態の) むしろこの「と」の用法こそがそう呼ばれるにふさわしいものであ

本稿の考察の範囲では、他の用法との本質的な差違は見られなかっ のであろう。 また、「連続」を条件法の中に含めない考えが多く見られるが、

る。本稿とて特に定見は持たないが、未解決である以上、考察の範 か、何をもって条件法と言うのかということは、未解決の問題であ ものであろう。しかし、日本語の条件法とはどういうものであるの 件法であるとし、それらに「連続」の用法が無いことを根拠とする た。「連続」を条件法に含めない考えは、「ば」や「たら」をこそ条

### д 非 :個別的事態を表す「と」

に入れておくことにしたい。

|用は広く考える方が有益であろうと考えて、「連続」を条件法の中

非個別的事態を表す「と」の用法には、

子供のころは、夏になると、毎日のように泳ぎに行ったもの

30

٤ などのように文末が過去形で、過去の習慣を表す等と言 われるもの

57

この辺は、毎年夏になると、海水浴客でいっぱいになる。

のとがあるが、本節では、ひとまず両者を区別せずに扱うことにする。 などのように文末が現在形で、恒常的な関係を表す等と言われるも まず指摘できるのは、個別的事態を表す「と」の用法が全てその

を表す「と」の用例を作ってみよう。 前節までに上げた各タイプの用例に少し手を加えて、非個別的事態 ままこの非個別事態を表す用法へと転換できることである。試みに

色のいい部屋です。(発見) この部屋は窓を開けると、日の前に淡路島が見えるとても景

33

家で昼寝をしていると、決まってどこかから電話がかかって

くる。(発現)

34 彼は室に入ると、いつもソファーに腰をかけた。(連続

35 ストーブを消すと、室内の温度は急激に下がります。(反応)

私の下宿は西日が入って、午後になると、ひどく温度が上が

36

37 昨シーズンは、どういうわけか試合が始まると雨が降りだし

と考えられる。「家で昼寝をしていると、電話がかかってきた」と このような転換が可能なのは、非個別的事態を表す「と」の用法 たものだった。(場面 個別的事態の一回的な関係の集積したものを表すからである

という「は」の文との関係に類似するものと言えよう。 は」の判断は、過去の経験を根底に置きながらも、結局はそれと それは、「犬が吠えた。」という「が」の文と「犬は、吠える。」 しかし、

のである。

いう経験が積み重なった時、例3のような表現が成立すると考える

は異なっている。 ら転換して作られる例32~37のような場合はもちろん、そのような 非個別的事態を表す「と」は、個別的事態を表す「と」の用法か

独立した話し手自身の責任による判断を表す点で、「と」の場合と

38 彼はひまが有ると、マンガの本を読んでいる。 湿度が高いと、カビが生えやすい。

関係を持たない、

すると考えるのである。 のような場合も含めて、あくまで事実関係の集積に密着した表現を 以上のような事情は、つとに松下大三郎によって指摘されている

ものである。松下氏は 乙 こんな日に外へ出ると濡れてしまふ。

の例をあげて、次のように述べている。 囚は理論ではない。実際である。濡れるだけの理由が有るか無

乙 私は酒を飲むと眠くなる。

して働いてゐる。 経験の結果を表しても経験から独立して居ない。経験を背景と いかは別問題であって、理由はとにかく実際濡れるのである。

はずである。 とは、前節の述べた「と」の基本的意味からも容易に導き出される さて、本節では、非個別的事態を表す「と」の用法を個別的事態

非個別的事態を表わす「と」の用法の性格をこのように考えるこ

えることができるであろう。例38、39のように前後句述語に状態の ものと考えてきた。前者の用法の分類は、後者のそれと対応して考 を表す「と」の用法との関係において、前者を後者から展開された

ものを取り、個別的事態を表す「と」の文に転換できない場合にも、

例えば、

40

41

前節の分類に当てはめることは可能と思われる。

必要がある。 非個別的事態を表す場合には可能であることの理由は、考えておくしかし、例38、39のようなものが個別的事態を表す場合には無く、

「と」前後句には、ことに「視点独立型」において、事態間の明瞭一回的なできごとの関係を表現する場合、前節で述べたように

点独立型」に対応する文においても、事態間の時間的な関係な厳密力なものと意識される。その結果、非個別的事態を表す場合の「視数性に支えられて、前後句事態間の関連性が一回的な場合よりも強変性に支えられて、前後句事態間の関連性が一回的な場合よりも強

である。ところが、非個別的事態を表す「と」の用法では、多数のの「視点独立型」の文の前後句述語が動作性のものに限られた理由な時間的前後関係が必要とされた。これが、個別的事態を表す場合

何さえもが、非個別的事態を表す場合には、広く前後句述語たり得を表す場合には「発見」の後句にしか成り得なかった形容詞述語のとのような事情で、時間的関係性を表示しないために個別的事態さが要求されなくなったものと考えられる。

# 五 「と」の一般条件法と仮定条件法

39のように表現が可能だったのである。

ば、この両者の間に一線を画すべきものと考える。けの共通性があったからなのだが、条件法の体系との関係から言えと現在形である場合とを一括して扱った。両者には、一括されるだと頭在形では、非個別的事態を表す「と」の文末が過去形である場合

(以前住んでいた家は)大雨が降ると、雨漏りがした。

(この家は)大雨が降ると、雨漏りがする。

40のような用法を確定条件法の側に位置づけたいと考える。かつを表す「と」の諸例と同一であると考えられる。本稿では、この例を表す「と」の諸例と同一であると考えられる。本稿では、この例ではそれに加えて新たな事実関係の成立の予想をに対して、41の例ではそれに加えて新たな事実関係の成立の予想をの間には、40の例が過去の事実関係の集積だけしか表していないのの間には、40の例が過去の事実関係の集積だけしか表していないの

からも)大雨が降ると、雨降りがするだろう」という二種類の関係(例41は、「(これまで) 大雨が降ると、雨漏りがした」と「(これ同様、偶然確定条件法と見るべきものと考える。

「と」の意味個性からして、この場合も非個別的事態を表す「と」

を含意している。このようなものこそ、松下大三郎氏の「現然仮定

とによって、両者を仲介するものと規定するべきであると考えるか定条件法と仮定条件法の中間に位置し、両者の意味を合わせ持つと条件法」にふさわしいものであろう。「現然仮定条件法」とは、確

らである。

ない。また、「恒常条件法」「恒時条件法」という名称をとらないのが必ずしも適当でないことから、この名称をそのまま使うことはしたよる。まず、「現然仮定」の「仮定」が右の規定にそぐわないこによる。まず、「現然仮定」の「仮定」が右の規定にそぐわないこによる。まず、「現然仮定」の「仮定」が右の規定にそぐわないこによる。「一般条件法」という言い方は、既に広く呼びかえることにする。「一般条件法」という言い方は、既に広く本稿では、この松下氏の「現然仮定条件法」を「一般条件法」と

らである。一般条件法には は、それが過去から未来まで永久に不変の関係を示唆するものだか

- 近頃は寝不足でベッドに入ると、すぐ寝入ってしまう。 島田さんの家に遊びに行くと、時々奥さんの手料理が出てく

のような例も含まれ、「恒常」「恒時」といった言い方はそぐわない

末に現在形を取り、既然の事実関係の集積と未然の事態関係への予 「と」の一般条件法とは、非個別的事態を表す「と」の中で、文

件法の含意する二つの意味のうち、既然の事実関係の集積の方を捨 ただし、捨象したと言っても、それは忘れされられるのではなく常 象し、予想の方のみを残したものが「と」の仮定条件法なのである。 のできごとに適用したものと言うことができる。すなわち、一般条 そのように一般的なものとしてとらえられた関係を特定された未然 想を含むものであった。これに対して、「と」の仮定条件法とは、

あって、常にことの一般的なあり方を背景として負っている「と」 れは、世界の一般的なできごとの関係とは一旦切り離された表現で のムードは、言わば話し手の考え一つで決められるものである。そ ように考えることによって説明できるだろう。命令、意志、要求等 しばしば指摘されている事実は、「と」の仮定条件法の性格をこの 命令、意志、要求等の表現が「と」の仮定条件法には無いという

また「と」の仮定条件法の性格を規定しているのである。

にその予想の基盤として意識され、働いているのであって、それが

の仮定条件法とは相容れないものなのである。

これらに対して、推量の場合には、「と」の仮定条件法が使い得

それと仮定条件法の「と」との関係を述べた。このように考えるこ るが、それは、推量が「命令」等とは異なり世界の一般的なできご とによって、前節に述べた個別的事態を表す場合から非個別的事態 と関係に基盤を置くという一面を持っているからに他ならない。 本節では、非個別的事態を表す「と」の用法を二分し、さらに、

定条件法から一般条件法へ、そして、一般条件法から仮定条件法へ を表す場合への展開の関係は、確定条件法の個別から非個別へ、 の展開としてとらえ直し、発展させることができるのである。

本稿で述べたきたこの「と」の用法の関係をまとめて例によって

示せば、次のようになるだろう。 ある年暖かくなると、ツバメが飛んできて軒下に巣を作った。 以前は暖かくなると、ツバメが飛んできて軒下に巣を作った

ろう。 来年も暖かくなると、ツバメが飛んできて軒下に巣を作るだ 暖かくなると、ツバメが飛んできて軒下に巣を作る。

ものだった。

現形式を丁寧に考察していくことを今後の課題としたい。 ても言えるだろう。そういった意味を含めて、「と」以外の条件表 要があるかもしれない。同様のことは、「と」の意味、用法につい であったが、それも、他の条件表現形式を検討する中で変更する必 ても発言した。特に条件法の体系に関する考察は極く部分的なもの の関係をめぐって考察し、その中から現代語の条件法の体系につい 本稿では、接続助詞「と」の意味と諸用法、および、それら相互

1 松下大三郎『改撰標準日本文法』(中文館、一九二八)五三四~五

ーページ。

2 后

3 接続助詞「て」との違いは、ここに生じる。「て」も、できごととで取られることになるのである。

3 松田剛史「『ト、テ、タラ』について」(『大谷女子大国文』一四号、学』五五巻五号、一九七八)一七○ページ。 国広哲弥「時間接続表現の意味――意義素の分析――」(『国語と国文

一九八四)一二九ページ。

八一巻三号、一九八〇)。 よび、岡崎正継「順態接続助詞『と』の成立について」(『国学院雑誌』まび、岡崎正継「順態接続助詞『と』の成立について」(『国学院雑誌』安田章「助詞②」(『岩波講座日本語 7』岩波書店、一九七七)、お

に従う。- 『世界子『発見の『と』」(『日本語教育』三六号、一九七五)の用語

8 注7の文献九三ページ。

9 注5の文献一三四~一三五ページ。

10 同右

12

一九七八)による。 一九七八)による。 の用法と機能(1)」(『日本語学校論集』五号・1 豊田豊子「接続助詞『と』の用法と機能(1)」(『日本語学校論集』五号・

この分類は、高橋太郎氏の「外的関係」と「内的関係」という条件法

内的な関係というのは、条件節(句)と主節のあらわすことがらがをあらわしているものである。していて、条件節(句)が、それを認識したり表現したりする活動外的な関係というのは、主節が現実のできごとやありさまをあらわ

の二分類にほぼ対応するものである。高橋氏は、次のように述べている。

それぞれ現実のできごとやありさまの内部要素としてかかわってい内的な関係というのは、条件節(句)と主節のあらわすことがらが

一九八三、二九九ページ)(高橋太郎「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』明治書院

るような関係である。

らえ直し、接続助詞「と」の用法に適用したものと言うこともできる。本稿の分類は、この高橋氏の分類を、視点という観点を根底においてと

松下大三郎『標準日本口語法』(中文館、一九三〇)二九〇ページ。

14 13

注1に同じ。